

育児不安を持つ母親が求める子育て支援サービス

阿部 範子

Child care support services desired by mothers anxious about child care

Noriko ABE

要旨：子どもに対する虐待のニュースは鎮まることなく、様々な対策が取られる中、特に地域での連帯意識の希薄化などによる母親の社会的孤立を最大の問題ととらえ、育児支援とその評価の積み重ねが早急に必要であると考ええる。

育児支援の実践報告では、子育てサークルへの参加によるメリット等が多く見られる。しかし、母親の育児不安の有無により、求められる子育て支援の在り方・内容・方法に違いが出てくる可能性があり、明らかにする必要があると考ええる。

このたび乳幼児健診に参加した母親に対し、育児不安の有無により求める子育て支援サービスに違いがあるかどうかを知るために調査を実施した。求める子育て支援サービスとして「場所」「曜日」「内容」「支援者」の4項目を設定し比較した。結果、育児不安を持つ母親は持たない母親に比べ「自分の悩みを聞いてくれる場」としての育児支援サービスを望んでいること、特に常勤の母親、子どもが一人の母親、核家族の母親にその傾向が見られること、「子どもを預けられる場」を望んでいることが明らかになった。

キーワード：育児不安、育児支援、母親のニーズ、子育て支援サービス

Summary : Abuse of children by parents has been reported by the media time and time again. Although various measures have been taken to resolve this problem, it seems necessary to note a mother's social isolation (especially due to the lack of a sense of togetherness with in the local community) as one of the most important issues associated with child abuse and to provide child care support, and conduct prompt and repeated assessments of the effects of such support.

Reports published from child care support practitioners have often demonstrated the advantages of a mother's participation in child care circles or groups. However, the optimum style, designs and methods of child care support can vary depending on the presence or absence of anxiety about child care on the part of the mothers.

The present study was undertaken to investigate whether or not child care support services desired by mothers participating in infant and child health check programs would differ depending on the presence or absence of anxiety about child care. In this survey, four elements of child care support services (place, day of the week, content and supporter) were analyzed in relation to the presence or absence of such anxiety. The survey revealed that mothers who were anxious about child care more frequently desired child care support services as "an occasion for talking about their problems related to child care" than did mothers who had no such anxiety. This tendency was particularly marked for mothers working full-time, mothers having only one child and mothers living in a nuclear family (family consisting of parents and children alone). The mothers also desired a place where they can leave their children.

Key words : anxiety about child care, child care support, maternal needs, child care support services

I. 緒言

子どもに対する虐待のニュースは鎮まることなく、様々な対策が取られる中、筆者は虐待・育児不安を引き起こす母親の背景にあるもの、特に地域での連帯意識の希薄化などによる母親の社会的孤立を最大の問題ととらえ、育児支援とその評価の積み重ねが早急に必要であると考えた。

育児支援の実践報告では、子育てサークルへの参加によって「子どもの遊び友達ができ」「子どもへの関わり方の参考になった」(原田, 2004)などのメリットを伝えるものが多く見られる。しかし、母親の育児不安の有無により、求められる子育て支援の在り方・内容・方法に違いが出てくる可能性があり、明らかにする必要があると考えた。

このたび乳幼児健診に参加した母親に対し調査を行い、育児不安の有無により求める子育て支援サービスに違いがあるかどうかを明らかにすることで、育児不安を持つ母親が求める育児支援サービスの特徴を明らかにしたので報告する。

II. 目的

母親の育児不安の有無により求める子育て支援サービスに違いがあるかどうかを明らかにし、育児不安を持つ母親が求める育児支援サービスの特徴を明らかにする。

III. 研究方法

1. 調査方法

平成21年3月～4月に某市保健センターで行った乳幼児健診(4・10か月児、1歳半児、2・3歳児)に参加した母親を対象にアンケート調査を実施した。調査内容は、母親の属性として年齢・職業形態・家族形態・日中子どもの世話をしている人は誰か、求める子育て支援サービスとして『場所』『曜日』『内容』『支援者』の4項目とした。『場所』は保育園・幼稚園・公民館・体育館・常に利用できる場所・その他、『曜日』は平日・土日祝・いつでも、『内容』は自由に何でも話ができる・自由に子育ての話ができる・自分の悩みを聞いてくれる・子育ての悩みを聞いてくれる・子育てのアドバイスをしてくれる・子どもを遊ばせる・子どもを預かってくれる・一緒に過ごす、『支援者』は同じ年頃の子どもの持つ母親・子育て経験がある同年代位の母親・子育てを終えた50～60歳代位の女性・子育て経験のある

女性の高齢者・地域の人・保育士・看護師・保健師・助産師・医師・他、を、それぞれ先行研究をもとに選択肢を設定した。さらに『場所』は、常に地域に開かれた場として数多く存在していることを活用し、子育て支援やコミュニティーネットワーク作りで成果を上げている(広井, 石井, 2004; 川原, 佐土, 吉田, 2003)神社仏閣を加えた。育児不安の有無は牧野による育児不安尺度10項目(牧野, 1985)を使用し、把握した。

2. 分析方法

育児不安尺度により得られた回答を得点化した。育児不安得点は40点満点であり、点数が低いほど育児不安が強い傾向を示す。最高・最低得点からそれぞれ20%の範囲を区切り、育児不安無し群、育児不安有り群と分類した。また得点の中間層60%の者を中間群とした。3群と、求める子育て支援サービスとして設定した4項目『場所』『曜日』『内容』『支援者』それぞれの回答との間でクロス集計し検定を行った。育児不安有り群に有意に高かった回答に対しては、属性等の項目を制御変数としてさらに検定を行った。

3. 倫理的配慮

目的と自由参加であること、調査に同意しなくとも不利益はないこと、調査結果は公表するが個人を特定されることはないことを説明し、同意が得られた場合に実施した。

IV. 結果

対象は351名、回収率89%、有効回答率91%(284名)であった。母親の平均年齢は31.1歳であった。育児不安得点の平均は25.62(±4.2)点、最高点37点、最低点12点であった。最高点から20%の範囲にあたる29～37点の母親77名を育児不安無し群、最低点から20%の範囲にあたる12～21点の母親42名を育児不安有り群、中間層60%の範囲にあたる母親165名を中間群とした。

1. 母親の属性と育児不安

母親の年齢は不安有り群では「30代前半」が36%と最も多く、不安無し群は「20代後半」が36%と最も多かった。両群ともに「20代後半」から「30代後半」が8割を占め、年齢による両群間の差は見られなかった(表1)。母親の職業形態は両群共に「常勤」、「専業主婦」が多く(表2)、家族形態は両群共に「核家族」が6割以上を占めており(表3)、ともに差は見られなかった。日中子どもの世話をしている人は「自分」、「保育

園」をあわせると両群共に8割を超えていた。「自分」が不安有り群では24%、不安無し群では51% ($p < 0.01$)、「保育園」が不安有り群では62%、不安無し群では42% ($p < 0.05$)で両群間に差が見られた(表4)。

表1 母親の年代

年代	不安有り群 (%)	不安無し群 (%)
10代後半	0	1
20代前半	14	12
20代後半	17	36
30代前半	36	26
30代後半	31	21
40代前半	2	4
合計	100	100

表2 母親の職業形態

職業形態	不安有り群 (%)	不安無し群 (%)
常勤	38	42
パート	24	22
自営	5	4
専業主婦	31	32
その他	2	0
合計	100	100

表3 家族形態

家族形態	不安有り群 (%)	不安無し群 (%)
核家族	71	62
拡大家族	29	38
合計	100	100

表4 日中子どもの世話をしている人

世話をしている人	不安有り群 (%)	不安無し群 (%)
自分	24	51
夫	0	0
義父	0	0
義母	7	4
実父	0	1
実母	2	5
保育園	62	42
その他	0	0
合計	100	100

2. 母親が求める子育て支援サービス

母親が求める子育て支援サービスについて、育児不安有り群、無し群、中間群の3群間で比較した。

サービスを受けたい『場所』は、3群共に「保育園」「常に利用できるところ」が多かった。差は見られなかったものの、不安有り群は「保育

園」が他群に比べ多く見られ、「常に利用できるところ」が他群に比べ少なかった。「公民館」は不安有り群に少なく、他群との間に差が見られた ($p < 0.05$) (図1)。サービスを受けたい『曜日』は、全体的に「いつでも自由に」が多く約半数を占め、次いで「平日」「土日祝」であり、差は見られなかった(図2)。サービスの『内容』は全体的に「子どもを遊ばせる」が最も多かった。特に不安無し群に多く、不安有り群・中間群との間に差が見られた ($p < 0.05$)。「自分の悩みを聞いてくれる」が、不安有り群に多く見られ、不安無し群との間に差が見られた ($p < 0.05$) (図3)。

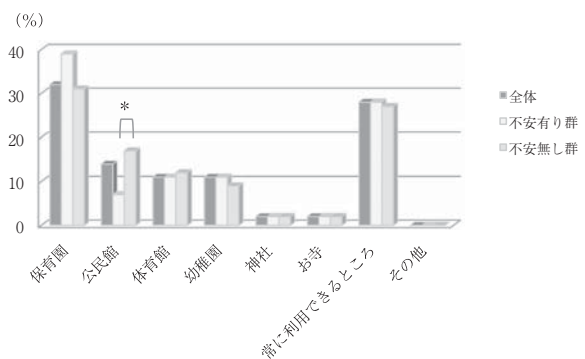


図1 母親が求める、子育て支援サービスを受ける場所

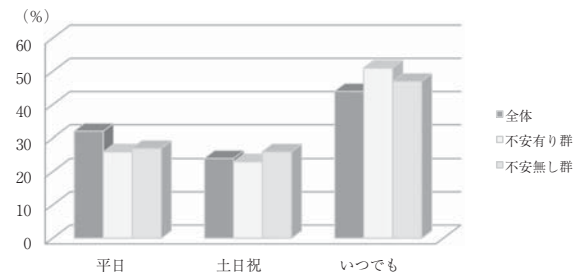


図2 母親が求める、子育て支援サービスを受ける曜日

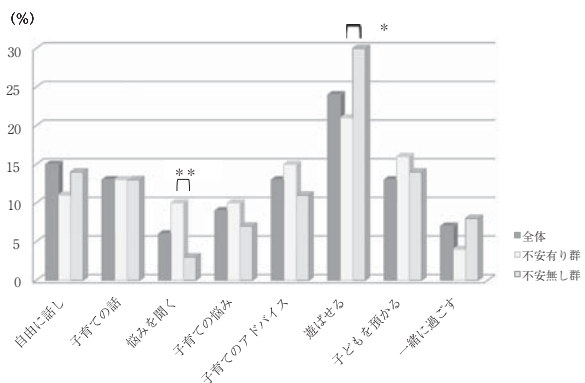


図3 母親が求める、子育て支援サービスの内容

「自分の悩みを聞いてくれる」に対して、母親の属性を制御変数としてさらに検定を行った結果、常勤の母親 (p = 0.004)、子どもがひとりの母親 (p = 0.006)、核家族の母親 (p = 0.001) の場合特に多い結果となった。「子どもを預かる」は、差は見られなかったものの、不安有り群に多い傾向が見られた。

求める『支援者』は全体的に「同じ年頃の子どもの持つ母親」が多く、次いで「保育士」「子育て経験のある母親」であった。「保育士」については差は見られなかったものの不安無し群に少ない傾向が見られた。「子育て経験のある高齢者」や「地域の人」、また「助産師」「医師」はいずれも少なく3群間に差は見られなかった(図4)。

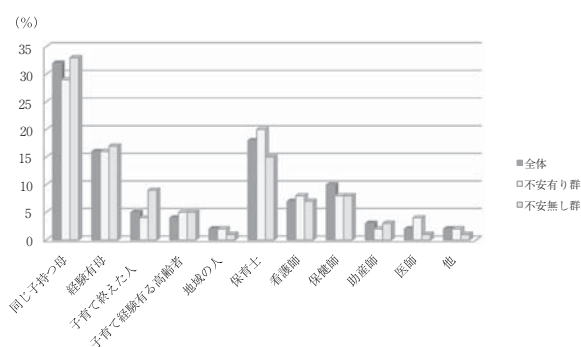


図4 母親が求める支援者

V. 考察

育児不安の概念は統一されたものではなく、現在のところ1) 子どもの授乳や排泄などの具体的な育児のやり方に対する心配事としてとらえる立場、2) 母親の育児困難感、育児に関する不安や心配、自信のなさ、育児意欲の低下、母親が育児に関して感じる疲労感としてとらえる立場、3) 育児に限らず家事や生活の総体から産み出される母親の生活ストレスとしてとらえる立場、が見られる。1) の立場は不安の原因が具体化されることから、それらが解決されれば割合容易に解決されると考える。3) の立場は母親の背景にあるものを広範囲に扱わなければならない、とらえるには困難である。新社会学事典では育児不安を「育児を担当している人が子どもの状態や育児のやり方などについて感じる漠然とした恐れを含む不安の感情」と表現しており、2) の立場を育児不安の概念としてとらえていくのが妥当と考える。牧野の育児不安尺度は育児不安を蓄積的疲労徴候に類似すると

とらえ、蓄積的疲労徴候調査の特性を参考に、育児期の母親の生活感情や意識を表現した言葉を利用しながら作成されたものであり。2) の立場を検証するに適すと考える。尺度全14項目のうち、調査を簡便にするために項目分析において χ^2 値の大きかった上位10項目を使用した。回答を点数化し、最高・最低点からそれぞれ20%の範囲を育児不安無し群、有り群と分類した。分類は先行研究(牧野, 1985)により、尺度の検定を行った際の区分を参考にした。得点の中間層60%は母親の人的・物的・社会的環境の変化などにより不安無し群、有り群のどちらかに移行する可能性を有する群と考える。

日中子どもの世話をしているのは、育児不安有り群では無し群に比較し「保育園」が多く、「自分」が少なかった。この傾向は母親が求める子育て支援サービスを受ける『場所』にも見られ、3群間の比較では差はなかったものの、育児不安あり群は「保育園」を望む者が多かった。調査対象地域の保健センターでは乳幼児健診を通し、子育てが困難と思われる母親に対し、保育園への入所を進めているため、このような結果になったことが考えられる。育児不安無し群では、「自分」で子どもの世話をする精神的余裕があるのではないかと考える。支援サービスを受ける『場所』は保育園に次いで、3群共に「常に利用できるところ」が多かったが、その中でも不安有り群では少ない傾向が見られた。不安有り群は自分が子どもと関わりながらサービスを受けるより、その中でも不安有り群では少ない傾向が見られた。不安有り群は、自分が子どもと関わりながら受けるサービスより、一時子どもと離れる精神的・身体的ゆとりの時間の確保を望んでいるのかもしれない。母親の生活様式の多様化を考えると、現在行われている主な育児支援サービスには時間的制約があることから、母親が必要としている時に利用できる身近なサービスのありかたの検討が急がれる。不安無し群・中間群に「公民館」が多く差が見られたが、地域に密着した環境にあり、時間的制約が割合少ない可能性があり、このような環境を利用できる母親に育児不安が少なかった可能性も考えられる。しかし、やはりここでも不安有り群は有意に少なく、前述したゆとりの時間の確保の必要性が考えられる。今回は選択肢のあり方が問題だったのか神社仏閣が少なかったが、常に利用できる可能性が高く地域に数多く存在する場として

意義あるものと考えられ、今後さらなる検討が必要である。サービスを受けたい『曜日』が「いつでも自由に」が最も多かったのも同様の理由によると考えられる。

母親が求める子育て支援サービスの『内容』として、3群とも「子どもを遊ばせる」が多く、中でも不安無し群に有意に多かった。他の子どもと自由に遊ばせる精神的余裕の現れなのか、明確なことはわからない。不安有り群に「自分の悩みを聞いてくれる」が多く、さらにその中でも「子どもがひとりの母親」「核家族の母親」が多かった。猪野（1995）は「第一子と二子以降で悩みの数に明らかに違いが見られた」と述べており、子どもがひとりの母親は悩みが多く、話しを聞いてほしいというニーズが高いことが考えられる。核家族の母親の場合は 育児不安が強く表れやすいとした先行研究とも関連し、悩みを聞いてくれる場や人の存在の必要性を感じられた。「自分の悩みを聞いてくれる」は「常勤の母親」も多く、「仕事をもっている母親の方が『育児困難感』が低く、『拘束感』も低い」とした榎本、福本、堀井、小松、塩見（1999）研究と相反する結果となったが、育児不安を持つ「常勤の母親」の場合は、誰かに悩みを聞いてもらう時間的余裕のなさや職場の人間関係が関連する可能性が考えられる。不安有り群に「子どもを預かる」が多く見られたが、サービスを受ける『場所』同様、ゆとりの時間確保を望んでいることが考えられる。

求める『支援者』に「同じ年頃の子どもを持つ母親」「保育士」「子育て経験のある母親」が多かったのは、サービスの内容に求めている「子どもを遊ばせる」つまり子どもと同年齢くらいの子どもがいること、「自分の悩みを聞いてくれる」相手であるに関連すると思われる。「子育てを終えた人」「子育て経験のある高齢者」や「地域の人」が少ないのは、子どもを遊ばせることが叶えられないこと、また、世代間交流や地域交流の希薄さが感じられる。

育児不安有り群に限らず、「保育園」「常に利用できる」「いつでも行ける」「子どもを遊ばせる場」「同じ年頃の子どもを持つ母親がいる」を求める母親が多いことから、内容をさらに分析し、母子の遊びの場の提供、母親の育児不安に対する支援など、系統立てた支援サービスの在り方の検討が必要と考える。

VI. 結論

育児不安を持つ母親は持たない母親と比較し、子どもを預けられる場、自分の悩みを聞いてくれる場としての育児支援サービスを望んでいる

VI. 引用文献

- ・猪野郁子（1995）. 母親の育児の悩みと育児感情との関係—松江市在住の幼児を持つ両親の調査から—。小児保健研究, 54(4), 473-477.
- ・川原健太, 佐土原聡, 吉田聡（2003）. 佐渡島のお寺の新しい活用に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 627-628.
- ・原田正文（2004）. 「人づきあいが得意ではない母親」も参加しやすい子育てサークル. 保健師ジャーナル, Vol60. No8, 812-816.
- ・広井良典, 石井秀樹（2004）. 「鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」の構想. 月刊福祉, 48-51.
- ・牧野カツコ（1985）. 乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—. 家庭教育研究所紀要, 11-24.
- ・榎本妙子, 福本恵, 堀井節子, 小松光代, 塩見武雄（1999）. 育児不安の実態と関連要因の検討（第2報）～育児不安測定項目の因子分析～, 京都医大医短紀要8, 163-172.